

2016年 冬号

楽らく通信



福祉会



【目次】

- 1 表紙
- 2 スペース楽活動報告
- 3 スペース楽2・グループホーム活動報告
- 4-7 歴史を訪ねて (3)
「マスコミ報道と精神障害者施策
1964年ライシャワー大使事件」
- 8 前期活動報告／書評／編集後記



【発行】

- スペース楽 小金井市東町 4-10-14 TEL: 042-388-6456 FAX: 042-316-3664 E-MAIL: space-raku@mx4.alpha-web.ne.jp
- スペース楽・2 小金井市本町 1-6-11 TEL/FAX: 042-388-7887 E-MAIL: raku2@jcom.home.ne.jp
- グループホームこがねい・ちぐら TEL/FAX: 042-387-8468 ●グループホームらく TEL/FAX: 042-383-6181

らく福祉会

検索



●スペース楽 活動報告●

《新パッケージになりました》



まず一番のご報告としましては、クッキーパッケージを新装したことです。スペース楽の創設以来作り続けていますが、今までクッキーの種類が増えることはあっても、一度もパッケージの見直しはおこなっていませんでした。以前より作業工程は複雑になりましたが、おかげさまで評判は上々です。また心苦しい決定ではありましたが、この変更に伴いクッキー価格の改定をいたしました。このパッケージを楽の冠とし、販路拡大につなげていきたいと思っています。（販路先募集しています。よろしくお願いします）

そして嬉しいことに、この新パッケージのデビューが同じ商店会である『こむぎ保育園』さんでの夏祭りでした。お誘い下さったおかげでお祭りに来られた保護者の方々に関心を持っていただく機会となりました。

また新たに加わった2件のマンション清掃も始まり、現在4カ所のマンション清掃となりました。今までやっていた清掃メンバーの実績が評価され、新たな仕事場所が増え、そのことでまた新たな清掃メンバーが加わり、マンション清掃事業も少しずつ大きくなってきています。マンション清掃を依頼してくださる方にとっても感謝です。公園清掃やマンション清掃、公園トイレ清掃に内職。これらの仕事も皆様の力添えやご理解を頂くことで、順調に作業させていただいています。

このように、様々な方々のご協力に支えられ、地域交流・社会貢献を進めることができました。また今年は共同募金会からの助成金で、念願の施設設備のクーラーを新しくできました。そして、さくらファンドさんの助成にて、スペース楽の表看板もリニューアルする予定です。こうやって振り返ってみますと、一歩一歩の積み重ねの大切さを感じずにはいられません。しみじみ。

(スペース楽/夏川&山根)

かわいいクッキーマークの数々（クッキー種類マークもこんな感じになりました）
いろいろ選べる 11 種類！



ローストしたナッツが香ばしく、ココナッツ、レーズンなどナッツ2種類、雑穀3種入ってます。



甘さ控えめな大人の味。刻んだアーモンド入り。コーヒー党におすすめ。



卵不使用。黒ごまたっぷり。ごま好きにおすすめ。



一番人気！さくさくの食感。オーガニックのオートミール入り。



有機栽培のココアパウダーがたっぷり。濃厚な味。



卵不使用。ローストしたクルミのほのかな苦みが人気。コクや深みがあります。



アールグレイとセイロンの香り！香りを生かしたクッキー。午後のひとときに。



サッパリ爽やかな味。国産レモン使用。香料は使っていません。ビタミン不足の方に。



卵不使用。バターたっぷり。香り豊かなココナッツ。スライスアーモンド入り



国産生姜をふんだんに使用！ローストしたクルミも入ってます。元気が出るクッキー。



エダムチーズの塩味と黒こしょうピリリ。ワインやビールのおつまみにも。

●スペース楽2 活動報告●

2016年度の楽2は、新たに月に1回のプログラムをいくつか取り入れての活動を始めました。

お抹茶の立て方、簡単な作法を教えてくださいまして美味しいお菓子と抹茶を楽しむ会。メンバープロデュースによるティーパーティ。桜並集会所をお借りしてストレッチ。栗山公園健康運動センターをお借りして卓球。

作業療法士の池谷さんに来ていただいて物づくりもはじめました。お皿にシールを貼ったり、絵を描いたりしてメンバーオリジナルのお皿やマグカップを作ったり、Tシャツを染めたり。出来上がった作品はそれぞれ持ち帰って毎日の生活に取り入れているようです。職員も染めてみたTシャツは、デザインの得意なIさんによって楽2の看板小僧らく太郎(仮)となりました。販売の際には看板小僧として活躍しています、どうぞ会いに来て下さい。

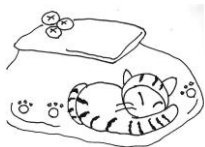
福祉会館閉館後、開催会場に困っていた春の展示会をカエルハウスの皆さまのご協力をいただき行うことが出来ました。

初めての場所で不安と期待を一杯に製作品をご紹介させていただきましたが、カエルハウスの関係者の皆さま、近隣の方、新聞広告を見て遠方から電車で来て下さった方。らく福祉会の理事、職員と沢山の方のご厚意、ご協力によって盛況のうちに開催することが出来ました。

さらに、展示会終了後もカエルハウスで常時製作品を販売していただけることになりました。

紙面を借りて心からの感謝をお伝えしたいと思います。

ありがとうございました。



(スペース楽・2 / 鮫島)



●グループホームこがねい・らく・ちぐら 活動報告●

《夜間避難訓練》

グループホームでは毎年避難訓練や災害伝言ダイヤルの使い方の確認、立川防災館での防災体験などを実施しています。今年度から、グループホームのメンバーには、3日分の水と食料の入った防災リュックを各自購入し、部屋には備品としてヘルメットを常備しました。今回は、防災リュックを背負いヘルメットを被って夜間避難訓練をおこないました。訓練前の説明をメンバーに行ったところ、「こんな重たいリュックを背負って逃げられないかも」との声もあがりました。メンバー全員無事避難することができました。後日感想を聞いたところ

- ・初めての訓練でしたが、落ち着いて行動できました。
- ・次回の夜間の避難訓練の時は、懐中電灯を忘れないように気をつけたいと思います。
- ・リュックとヘルメットを実際に持ってやったのは、とても良い備えだと思いました。
- ・暗くてこわかった。(避難場所への) だいたいの道を覚えました。

実際に体験してみないとわからないことが多々あると思いますので今回の夜間避難訓練で感じたことを今後活かしていきたいと思っています。

最後になりましたが、避難場所としてご協力頂いた学校の皆様ありがとうございました。

(グループホームらく / 小松)

ライシャワー大使事件

1964年10月10日(後に体育の日となる)東京オリンピックが開会された。1940年東京で開催されるはずだったオリンピックは戦争のために幻となり、戦後の復興を経てアジアで初めて開催されるオリンピックであった。高度経済成長が始まり、もはや戦後ではないと言われていた一方で、各地で公害問題が顕在化し、水俣病はすでに発生から10年以上が経過していた。また、在日米軍の基地からは、南方に向け輸送機が飛んでいた。翌65年3月、米軍は北ベトナムを爆撃する。

そんな1964年オリンピック開会の7か月前、3月24日正午頃、戦後初めて日本で外国の要人が襲われる事件が起こった。国民的反対運動となった1960年安保闘争から4年しか経っていない時である。

東京赤坂のアメリカ大使館裏口から車に乗ろうとしたライシャワー駐日アメリカ大使が工員風の少年に太腿をナイフで刺され負傷、少年はその場で書記官や海兵隊員らに取り押さえられ、赤坂署員に引き渡された。大使は虎ノ門病院へ運ばれ手術を受け、全治3週間、4月15日に退院する。

事件当日、政府は池田首相から米政府ジョンソン大統領に対して陳謝の電報を送り、翌日、国家公安委員長が辞職する。その日の夜、以前から予定されていた日本からアメリカへのテレビ宇宙中継実験が初めて成功した。その内容は録画していた首相から米国民へのメッセージを急遽変更し事件の陳謝にされた。それは4か月前、前年の11月アメリカからの初のテレビ宇宙中継がジョン・F・ケネディ大統領の暗殺を伝えたことと奇妙な符号を示した。

さて大使を刺したのは、事件当日の朝日新聞夕刊によれば「少年(19才)で、『両目が悪いため就職もできない。アメリカの方針が悪いためだ』などと口走っていて、精神異常の面もあるが、さらに追及している」とある。逮捕後、精神鑑定を経て6月に精神衛生法により強制入院(措置入院)となった。入院先は都立松沢病院である。精神分裂病と診断され、事件当時は心神喪失状態であったということで8月に不起訴処分となる。少年はその後も入院治療を受けていたが7年後に自殺してしまった。

これがライシャワー事件の概要である。当時のマスコミは「異常者の犯罪どう防ぐ」「野放し状態なくせ」等の報道が行われ、4月28日には警察庁から厚生省に精神衛生法の改正等の申し入れが行われた。そして事件から約1年後、翌1965年6月、改正精神衛生法が施行された。後にライシャワー事件が精神衛生法改正に大きな影響を与えたといわれるゆえんである。

また、ライシャワー大使はこの時受けた輸血がもとで後に血清肝炎となり、これを機に日本の輸血制度は血液銀行が血液を買い上げる売血制度(当時は輸血の98%が売血)から日本赤十字社が行う献血制度へと変わった。これもまた事件の影響であった。

事件から16年後1980年12月の神戸女学院大学研究所『論集・第27巻第2号』に村上直之・藤田健一両氏による「ライシャワー事件と新聞報道 - 精神衛生法改正の社会的過程」という論文が掲載された。

この論文は日本の精神衛生立法が戦前からたえず「犯罪事件」という外的条件によって動かされている問題もさることながら、「一つの事件がそれに対する社会的反作用としてマスメディア、一般国民、専門家、官僚、政治家等の諸勢力を作動させ、…法律制度という社会の構造要件を変えるにいたる。…私たちの関心はその過程全体にある。」とし、事件発生から精神衛生法改正にいたるまでの約1年3カ月を当時の新聞・テレビの報道に即し仔細に検討している。



その論文によると事件から法改正までの約1年3ヶ月、当時新聞等が世論に対して行った「扇動」は [「国民感情」の恐怖を煽ることに終止していた時期と、その恐怖を打ち消しヒューマンイズムを喚起させようとした時期、さらにまた恐怖を煽ろうとした時期というようにサイクルを描いていた。] という。以下論文の一部を要約してみる。

① 最初に恐怖を煽ることに終止していた時期（事件発生から5月3日まで）：

事件の翌日3月25日から新聞各紙は「精神障害者」「精神病者」「精神薄弱」「異常者」「変質者」等の語を乱発し、その社説や学識経験者、評論家を集めた座談会、論説等で「精神障害者野放し」の現状を憂い、対策論議に湧く。しかし、この時期、新聞各紙が事件についての意見を求めた精神医療の専門家はたったの二名だけであった。3月26日、自民党治安対策特別委員会は「異常者施設増強の方針」を決議。池田首相は国会で「精神病対策」を行うことを約束する。そもそも池田内閣は「所得倍增計画」とともに「社会保障対策」の中に医療保障として「結核・精神病」の国庫負担を約束していた。

国家公安委員会は3月28日、事件について警察に手落ちはないとし、「犯罪予防の強化」「戸口調査の実施」を提案。厚生大臣は3月29日、精神障害者対策強化の具体策として「病床の増設を急ぐ」「医師の報告義務づけ」を指示。警察庁は各都道府県警に対して「精神障害者リスト」の作成を指令し実施。また、4月28日警察庁の保安局長から厚生省の公衆衛生局長に「精神衛生法の改正等について申入れ書」が出される。5月1日の閣議で厚生大臣は今国会会期末に精神衛生法改正案を提出したいと述べ、国家公安委員長が「精神病者の犯罪防止のために精神衛生法改正が必要と強く要望」と報告。池田首相は「緊急に必要な部分のみの改正」に同意を下す。

② ヒューマンイズムを喚起させようとした時期（5月4日に朝日新聞第一面トップに法改正反対の動きが報じられた時から翌1965年2月15日まで）：

このように精神衛生法改正が話題にされている渦中、日本の精神科医140数名、学会の首脳メンバーはアメリカ精神医学会の招待でロサンゼルスにいた。都立松沢病院の若手医局員数名は渡米による院長不在の折り、都内の桜ヶ丘、烏山両病院の医局員と連絡を取り合ってこの「改正」に反対を決意する。当時、吉岡真二、加藤伸勝、岡田靖雄ら医局員は明治時代以降の精神衛生行政の歴史を研究し、1950年の精神衛生法制定以後も「社会防衛論」にもとづいた治安対策の面にのみ機能してきたことを憂えていた彼らは厚生省の若手官僚、大谷藤郎厚生技官らと



ともに「精神衛生行政研究会」を前年より続けており、事件発生前に5月下旬に開催される日本精神神経学会のシンポジウムに「精神衛生法改正」のテーマを掲げるよう学会理事会に要求していた。

彼らの法改正構想は今回の事件による警察庁のイニシアティブによる緊急一部改正とは異なるものであった。彼らは与野党、厚生省、政府への陳情を決定、学会の正式活動として

承認を得るべくアメリカへ連絡を取り、秋元波留夫学会理事長以下、首脳陣の帰国を要請。

また、朝日新聞社へ電話をかけ取材を依頼する。この時電話を受け松沢病院を訪れたのは朝日新聞政治部厚生省詰めの筑紫哲也記者(後の「朝日ジャーナル」編集長、TBS「ニュース23」司会者)であった。筑紫記者は反対運動の詳細を聞き、5月4日朝日新聞朝刊第一面トップに「精神衛生法改正 学会・病院強く反対／取締り、人権侵す恐れ／きょうにも政府に申入れ／“家族が患者隠しては”」の見出しで記事を書く。

この記事を通機として、新たに東大、慶大をはじめとする関東各地の大学病院医局員、看護師、患者家族会が加わり、陳情活動は翌5日から8日にわたり議員会館を中心に昼夜の別なく続くこととなる。その結果、6日には自民党の田中正己衆議院社会労働委員会理事がいち早く「緊急一部改正」に難色を示し、7日に社会党国会対策委員会が反対を表明、陳情を受けて三木武夫自民党政調会長が「反対」を約束する。厚生大臣も「改正を無理押ししない」と言明。8日には官房長官が記者会見で「今国会は困難」と語り、9日に厚生大臣が「今国会は見送り」と記者会見する。

5月11日に厚生省は精神衛生審議会に「精神衛生法の全面改正について」諮問する。法改正の主導権は法務省・警察庁という治安当局の手を離れ、精神医療関係者も含めた審議会という場に移り、7月25日に「中間答申」が出される。この時点では、警視庁主導の「緊急一部改正」の方向が消え、精神衛生関係者の「全面改正」の方針が打ち出され、「精神障害者の警察への届出制」(警察庁申入れ)や「医師の通報義務制」(厚生省案)という精神衛生行政の治安行政化の問題は継続審議となる。翌1965年1月14日「最終答申」が厚生省に提出された。結局、「届出制」「通報義務制」は保留となり、類する事項として「緊急入院制度」が加えられる。中間答申が医療保障の拡充に重点が置かれていたのに対して、最終答申には治安対策の面が再び表れている。最終答申を受けた厚生省は「精神衛生法一部改正案」を作成。結局、精神医療関係者の要求した全面改正は実現しなかった。

- ③ 再び恐怖を煽ろうとした時期(猟銃乱射魔事件が報道された1965年2月16日から改正案の可決成立が報じられた6月2日まで):名古屋で起きた事件をはざりに複数の事件で再び「精神障害者野放し論」が各新聞紙上をにぎわし、治安強化の面に力点をかけた精神障害者対策の論議に火をつけている。こうした新聞上の「野放し論」の再燃もすでに国会に上程されていた精神衛生法改正案に影響を与えることはなかった。

以上が論文の一部ではあるが当時の動きが良く分かり、新聞等の報道が精神衛生法改正に影響を与えたこと、また事件が起きると恐怖を煽る論調が復活してくることなど今だに考えさせられる。

このようにライシャワー事件が精神衛生法改正に影響を与えたことは確かではあるが、これによって国の方針が変わったわけではない。中間答申と最終答申の乖離がそれを物語っている。

犯罪予防を口実とした治安対策の強化は防ぐことができたが、精神科病床数の増加は続いていく。そもそも国はこの事件以前から 1954 年の「全国精神障害者実態調査」で推定数 130 万人・要入院 35 万人という数字を出しており、1958 年に医療法に精神科特例（医師：一般科の 1/3・看護職：2/3）を設け、1960 年に医療金融公庫を発足させ、精神病院に対する低利・長期融資を始める。翌 1961 年に措置入院費に対する国庫負担を 50%から 80%に引上げ、入院患者の 8 割が公費負担となるなど、今で言えば規制緩和と民間活用への道を広げ民間精神病院の増設へと突き進んでいく。

1960 年 7 月に発足した池田内閣は「所得倍増計画」とともに「社会保障対策」の中に医療保障として「結核・精神病」の国庫負担を約束していた。その中味がこれであった。

ライシャワー事件がなくても、そして事件以前から国の厚生官僚は民間の精神病院を増やしていく方針を立て着実に実行していたのだ。ライシャワー事件はむしろ政治家にその必要性を印象付けることとなったのではないだろうか。

精神衛生法改正の翌 1966 年の精神科病床数は公立 3 万床・民間 15 万床になっている。ちなみに 1953 年の精神科病床数は 3 万床、戦前も同程度の病床数であった。

精神病院は儲かるということで異業種の参入もあいつぎ畳敷きの大部屋など劣悪な環境で薬漬けという治療が横行し、看護人による暴力も頻発する。精神医療の質をないがしろにし収容人数のみを増やしていくこの施策は、戦前の呉秀三らの精神医療改革を水泡に帰したかのようで病院が巨大な収容所と化し、社会に対してはかつての座敷牢や私宅監置の役割を担っていく。

1968 年には国が WHO に調査を依頼して、日本の精神病院の脱施設化、病床数の削減、リハビリなどのクラーク勧告が出されたが、厚生省はこの勧告を無視し国は精神病院の増設をさらに続けた。その結果、1970 年には 20 万床、1980 年には 30 万床、1985 年には 35 万床。この数は 30 年前 1954 年の要入院 35 万人の数と符合する。

1968 年の WHO クラーク勧告という絶好の機会があったにもかかわらず精神病院施策を修正しなかったために日本は世界にも例を見ない精神科病床数の異常に多い国になってしまった。当時の日本医師会会長・武見太郎氏さえ精神病院の経営は牧畜業者のようだと批判していた。

その後、看護人が患者を暴行し死に至らしめる等という事件があいつぎ 1984 年の宇都宮病院事件を受け、国連人権委員会等から日本の精神医療に対して非難勧告が出され、1987 年にそれまでの精神衛生法が精神保健法にかわり、1993 年の障害者基本法によりやっと障害福祉の対象とされ、さらに国連等の長期入院に対する勧告などを経て退院促進事業が行われたが、2016 年の現在でもこの国の精神科病院には 30 万人が入院している。

さらにこの国では 1977 年頃から学習指導要領でこころの病気も情報も義務教育の教科書に記載されなくなり、やっと 30 年後の 2005 年に日本学術会議から誤解や偏見防止のために教科書に採用し授業で取り上げるべきとの提言が出されたが、いまだに実現されていない。

そして 1960 年に精神医療に適用された規制緩和と民間活用という流れが継続され、自己責任の名のもとに公的責任の縮小、人権や安全性の軽視、収益性の追及となり社会福祉にお金を掛けないこの国ではさらに貧困ビジネスへと拡大し、今では社会全体に万延している。

この社会のあり方全体を変え、共に生きる社会の実現をみるために、長い時間を掛け様々な分野で多くの方が実践を積重ねて来ている。ささやかだが私たちもその端に加わるよう地域で活動を続けて行きたいと思う。

2016.08.27 富澤淳一

参考文献

『論集・第 27 巻第 2 号』 1980 年 村上直之・藤田健一 神戸女学院大学研究所

2016 年度前期活動報告 スペース楽 楽・2 グループホームこがねい・らく・ちぐら

4月	1.レク-合同花見(楽・楽・2) 8.DVD鑑賞会始める(楽・2) 12.今年度パソコン教室開始(楽) 14.レク-カラオケ(楽)、ストレッチ始める(楽・2) 19.ホーム連絡会(GH)
5月	17.新規マンション①清掃開始(楽)、ホーム連絡会(GH) 18.抹茶の会始める 19.卓球始める(楽・2) 20.レク-競馬博物館(楽・2) 23.レク-コココーラ工場見学(楽) 25.OTさんとつくる会始める(楽・2)
6月	4.出張販売-黄金井名物市(楽) 6.レク-高幡不動(楽・2) 7.新規マンション②清掃開始(楽) 15-17.作品展覧会-カエルハウス(楽・2) 21.ホーム連絡会(GH) 29.ティーパーティー始める(楽・2)
7月	2-3.出張販売-東センターまつり(楽) 7.レク-カラオケ(楽・2) 11.「就労支援ガイダンス」ハローワーク立川・就職支援コーディネータ鈴木さん、妹尾さん(楽) 14.レク-映画「ズートピア」「アリスインワンダーランド」(楽) 19.レク-ポリシヨイサーカス(楽・2) 小金井社協「夏の体験ボランティア」(市内小中高生)受け入れ(27.楽)(25~.27 楽・2)
8月	出張販売-日本福祉教育専門学校スクーリング(1.15.22.楽)(1.楽 2) 4.納涼会(楽) 6.出張販売-こむぎ保育園夏まつり(楽) 15.防災訓練「災害ダイヤル」(楽) 19.レク-南極・北極科学館(楽・2) 小金井社協「夏の体験ボランティア」(市内小中高生)受け入れ(2.8.22~26.楽・2)
9月	出張販売-国立精神神経センターデイケア祭(15-16 楽)(15 楽・2) 29.夜間避難訓練(GH) 30.レク-エプソン水族館(楽・2)
10月	2.小金井市総合防災訓練~農工大(楽) 6.レク-カラオケ(楽・2) 9.出張販売-聖ヨハネ祭(楽・楽・2) 15-16.出張販売-市民まつり(楽・楽・2) 20.レク-迎賓館(楽・2)

書評

『社会保障が経済を強くする - 少子高齢社会の成長戦略』 盛山和夫 著 光文社新書 2015 年刊

この本は、悪者扱いされる社会保障費は本当に削減するしか道はないのかと問い、むしろ社会保障で経済成長をすべきと訴える。社会保障費を削減すべきという考えや小さな政府論の誤った「常識」を指摘し、社会保障と経済とは両立し、むしろ経済にとってプラスになるので「効率性重視」から「生活革新」型の成長戦略へシフトすべきと説く。著者は社会学者であり、少子化対策や年金、債務問題も詳しく説き明かしてくれる。これからの日本社会を考えるうえで大変参考になる本である。ぜひ一読を。

らく福祉会賛助会員

らく福祉会賛助会員の皆様には、
温かいご支援ご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。
今後とも、ご支援のほどよろしくお願い致します。

らく福祉会賛助会員 年会費

一口 2,000 円

郵便振替 口座番号：00160-5-171403

編集後記

2016 年冬号皆さんのおかげで出せました。(F)
初参加でした。普段使わない目と頭を使ってショー
ト寸前です。(K)

冬号のおすすめ焼き菓子！！



フルーツケーキ

大 1000 円
小 500 円

開設当初から 20 年以上変わらぬ味を、変わらぬ価格
でご提供しています。手作り甘夏ピールや有機レーズ
ン、くるみ、国産レモンなどたっぷり具が入っています。
断然お買い得！！